

文脈・状況を受ける *c'est NP qui VP*

平塚 徹

0. 序

従来、*c'est NP qui VP* 型の構文には、強調構文・分裂文としての用法の他に、無題文・単一判断としての用法が指摘されてきた。本研究は、この用法が典型的な無題文とはかなり分布が異なっていることを指摘し、むしろ、文脈・状況を受けた指示代名詞 *ce* を主題とする、有題文と考えるべきことを主張する。更に、その意味内容についても考察を試みる。

1. 問題提起

1.1. 無題文・単一判断としての *c'est NP qui VP*

C'est NP qui VP 型の構文が、主語を強調する分裂文としての用法以外に、別の用法を有することは、LERCH (1934), WARTBURG et ZUMTHOR (1947), GRÉGOIRE (1949), POTTIER (1949), 朝倉 (1955) で、既に指摘されてきたが、先ず、これを無題文・単一判断とする議論から見ていく。

川本(1958-60[1985])は、三上(1972)の陰題や無題といった概念を援用して、*c'est NP qui VP* 型の構文の機能を分析した。

(1) — *Ça ne va pas?*

— *Laisse, lui dis-je. Ne vous occupez pas de moi. C'est ma mère qui est morte.*

この文例では二人の対話者のあいだにまだ誰かの「死」ということについて語られてはいない。「死」が話題にのぼっていないくらいであるから、その死という過程の主体、つまり誰が死んだのかについては、もちろん何も触れられていない。そこで「母の死」を伝達するにあたって「母」も「死」も *propos* 的性質を担っていると解釈される。ここには主題がない。「母が死んだ(のだ)」は無題の文だ。(川本, 1985: 52)

よって、*c'est NP qui VP* 型の構文は、二つに分類されることになる。一つは強調構文で、陰題の表示という機能を担っており、もう一つは問題の構文で、無題の表

示という機能を担っている。前者は、「 α が…する(…である)」とも、「…する(…である)のは α だ」とも訳すことができるのに対して、後者は「 α が…する(…である)」とは訳せるが、「…する(…である)のは α だ」とは訳せない。

また、GRÉGOIRE (1949) は *Le facteur qui passe!* といった構文を問題にして、*Il y a / C'est / Voilà le facteur qui passe!* といった構文を、その迂言的な同義表現としている。これを受けて、木下(1978)は、*il y a NP qui VP* 型の構文を、新情報である NP を、NP VP 型の構文の主語とするのを避けて、文の後方へ移す為の構文とした上で、川本の所論も踏まえつつ、(*il y a / c'est / voilà*) NP qui VP 型の構文を、KURODA (1972) の言う単一判断とした。更に、古川(1984)は、木下に従って、名詞句+疑似関係節という連辞について、単独で、もしくは *il y a, c'est, voilà* 等の導入辞と共に現われて、単一判断を表す機能を有しているとした。

更に、WEHR (1984) は、談話で言及されてこなかった事柄 (TOPIKneu) について、何か (COMMENT) を伝えるものとして *Neutrale Beschreibung* (中立叙述) なる概念を定義して、これがフランス語では、① *IL Y A NP QUI*, ② *C'EST NP QUI*, ③ *J'AI NP QUI*, ④ *VOILA NP QUI*, ⑤ *NP QUI*, ⑥ *ET NP QUI* といった構文で表現されるとした。そして、①と②の区別は無いように見えると述べている¹⁾。SASSE (1987) は、単一判断を表示する構造として、通言語的に幾つかのパターンを列挙し、その中の *split structure* を例証する為に、WEHR の六つの構文を引用している。

以上のように、*c'est NP qui VP* 型の構文は、分裂文の用法以外に無題文・単一判断を表示する機能を有しており、(*il y a / voilà*) NP qui VP とほぼ等価であると見做されてきた。

1.2. 先行文脈の説明としての *c'est NP qui VP*

ここで、少し異なった観点からの分析を見てみる。朝倉(1955)は、問題の構文に対して、「前文の説明」という用法を指摘している。

(2) *J'avertirai ton papa que tu musardes et il te grondera.*

— *Madame, c'est Poil de Carotte qui m'a dit d'attendre.*

また、*Qu'est-ce qu'il y a?*, *Qu'est-ce que vous avez donc?* 「どうしたのです」の答えにしばしば用いられると述べている。確かに、無題文は「どうしたのです」の答えによく用いられるが、この用法自体が無題文であるかどうかは問題である。

LERCH (1934) は、(3) の返答において *ce* が *das Vorhergehende* (前述の事柄) を受けているとし、問題の文は、おおよそ「僕を泣かしたのはお父さんだ。彼が僕を打った」という意味だと考えている。

(3) *Pourquoi est-ce que tu pleures?*

— *C'est mon papa qui m'a battu.*

また、(4) においても、*ce* は *das Vorhergehende* である *le bruit* を受けるとして

いる。

- (4) (Ils entendirent dans le vestibule le bruit sec d'un bâton sur les planches.) C'était Hippolyte (足が不自由な下男) qui apportait les bagages de Madame.

この場合、話者は、先ず C'est mon papa や C'était Hippolyte によって思考内容全体を表現しようとして、その後、関係節でもって補足すると LERCH は述べている。これには、第四章で見るとように幾つか問題があるが、ce を単なる虚辞とせず、そこに意味内容を認めたことは重要である。何故ならば、それが前述の事柄を受けているとするならば、主題として機能している可能性が出てくるからである。

2. 概念準備

2.1. 定義

本論に入る前に、主題・有題文・無題文という概念について、情報伝達における機能という観点から整理しておきたい。

言語行為の本来的・中心的な機能は情報の伝達である。ある一定の内容を有する情報の内部には、聴者の意識内に活性化するのに労力を要する部分も、要しない部分も存在し得る。最も労力を要しないのは、既に意識内に活性化されている場合であり、CHAFE (1976) の given や、同 (1987) の active がこれに相当する概念である。更に、CHAFE (1987) の activation states は、活性化の容易さを反映したスケールであると言える。これを活性度と称することにすると、activation states のように、離散的であるとは限らない。ここではむしろ連続的なものと想定しておく。

文において、活性度のある程度高い部分と、ある程度低い部分が存在した場合、そこに「ある事柄 C_1 について、別の事柄 C_2 を述べる」と表現し得る事態が生ずる。そこで、 C_1 を主題、 C_2 を説述と呼ぶことができる。もし、全体的に一様に活性度が低いと、そこには主題が現われないことになる。そこで、主題の有無により、文を有題文と無題文に分けて考えることができる。但し、活性度自体が連続的である以上、主題性も連続的な概念たらざるを得ないし、有題文と無題文の分類も、截然としたものではない。

このような機能的な意味での主題性は、言語形式とかなり相関を示す。GIVÓN (1983) は、このような主題性を良く反映し、且つ数量化の容易な continuity という指標を設定し、それと言語形式との相関性を、広範囲に亘って実証的に示したものと見える。即ち、常に特定の要素の主題性が他の部分に比べて高い構文や、常にとどの部分も主題性が低い構文が存在し得るのである。すると、前者は有題文であることを表示する構文だということになり、後者は無題文であることを表示する構文だということになる。もちろん、構文の有題性・無題性も離散的な概念ではなく、連続的なものとする。

2.2. フランス語の諸構文

次節で関連してくる構文を、有題文～無題文のスケールに載せると、(5) のようになるであろう。それぞれの例文を(6)に挙げる。なお、ここでは、主語あるいは実主語の主題性を特に問題にしている。(但し、実主語とは、動詞 V に対して主語と同じ意味役割を担う名詞句を指すものとする)

- (5) a. cl-V(X)
b. NP V(X)
c. il y a NP qui V(X)
- (6) a. Il est tombé dans l'escalier.
b. François est tombé dans l'escalier.
c. Il y a François qui est tombé dans l'escalier.

(5a)において、接辞代名詞の指示対象は、普通、聴者の意識に活性化されていると、話者が想定しているものと考えられる。非人称や仮主語の場合を除けば、接辞代名詞の主題性はかなり高いと見做せる。

(5c)は、逆に、かなり無題文的だと言うことができる。

(5b)は、両者の間に来るであろうが、個々の具体例での主語の活性度にはある程度の分散が見られるだろう。極端な場合、不定名詞句を主語とするような低い場合もあるし、cl-V(X)や右方転移と交替可能な程度に高い場合もあり得るだろう。しかし、第三節のほとんどの作例では、おおむね(実)主語が聴者の意識に無いと解釈される場面を想定しているので、かなり無題文的な用法と見做せる範囲に収まっている。

3. 他構文との比較

本節では、第一節で問題にした用法の c'est NP qui VP 型の構文(以下, CQ)を、NP VP 型の構文(以下, SV)や、il y a NP qui VP 型の構文(以下, IQ)と比較する。そして、指示代名詞 ce が文脈・状況を受けていると仮定することで、CQ の振舞いが説明されることを示す。

3.1. データの提示

まず、データを一通り提示する。(なお、評価の表示は大体次のように理解されたい。○: 自然, ×: 不自然, ?: インフォーマントによって自然だったり不自然だったりする。詳細は注を見られたい²⁾。)

I. 何らかの具体的状況下で、Qu'est-ce qui s'est passé? という質問に返答する場合、確かに CQ は、SV や IQ と、かなり交替可能である。このような用例は、CQ を無題文とする根拠となっている。

- (7) (On a entendu un bruit.)

Qu'est-ce qui s'est passé?

- a. — François est tombé dans l'escalier.
- b. — Il y a François qui est tombé dans l'escalier.
- c. — C'est François qui est tombé dans l'escalier.
- d. — Quelqu'un est tombé dans l'escalier.
- e. — Il y a quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.
- f. — C'est quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.

(8) (En indiquant du doigt l'eau sur le tapis)

Qu'est-ce qui s'est passé?

- a. — François a renversé le vase.
- b. — Il y a François qui a renversé le vase.
- c. — C'est François qui a renversé le vase.
- d. — Quelqu'un a renversé le vase.
- e. — Il y a quelqu'un qui a renversé le vase.
- f. — C'est quelqu'un qui a renversé le vase.

II. 何の脈絡も無く新しい事態を伝える場合、SV や IQ は自然なのに対して、CQ は不自然である。これは、無題文の生起する典型的な場合なので、CQ の無題性をかなり疑わしめるものである。

- (9) a. Ton nez coule!
 b. Il y a ton nez qui coule!
 c. C'est ton nez qui coule!
- (10) a. Madame, votre sac à main est ouvert!
 b. Madame, il y a votre sac à main qui est ouvert!
 c. Madame, c'est votre sac à main qui est ouvert!

III. 何かが起こったこと、あるいは起こることを前提しない質問に返答する場合も、SV や IQ は自然なのに対して、CQ は不自然である。

- (11) Y a-t-il quelque chose de divertissant aujourd'hui?
 a. — François va jouer du Bach.
 b. — Il y a François qui va jouer du Bach.
 c. — C'est François qui va jouer du Bach.
 d. — Quelqu'un va jouer du Bach.
 e. — Il y a quelqu'un qui va jouer du Bach.
 f. — C'est quelqu'un qui va jouer du Bach.
- (12) Y a-t-il eu quelque chose pendant mon absence?
 a. — François est venu vous voir.
 b. — Il y a François qui est venu vous voir.
 c. — C'est François qui est venu vous voir.

- d. — Quelqu'un est venu vous voir.
- e. — Il y a quelqu'un qui est venu vous voir.
- f. — C'est quelqu'un qui est venu vous voir.

IV. Qu'est-ce que c'est que ce N? という質問に対しては, CQ は自然になる.

(13) Qu'est-ce que c'est que ce bruit?

- a. ? — François est tombé dans l'escalier.
- b. ? — Il y a François qui est tombé dans l'escalier.
- c. — C'est François qui est tombé dans l'escalier.
- d. — Quelqu'un est tombé dans l'escalier.
- e. — Il y a quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.
- f. — C'est quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.

(14) Qu'est-ce que c'est que ce bruit?

- a. — François a laissé la télé allumée.
- b. ? — Il y a François qui a laissé la télé allumée.
- c. — C'est François qui a laissé la télé allumée.
- d. — Quelqu'un a laissé la télé allumée.
- e. — Il y a quelqu'un qui a laissé la télé allumée.
- f. — C'est quelqu'un qui a laissé la télé allumée.

3.2. データの解釈

CQ のこのような分布特性を説明するために (15) を提案する.

(15) CQ は文脈・状況を受けた指示代名詞 *ce* を主題とする有題文である. 換言すれば, CQ が適切であるためには, *ce* で受けられるような具体的な文脈・状況が存在しなければならない. これに基づいて, それぞれの場合を説明していく.

先ず, IV では, 質問自体が *ce N* について尋ねているので, それを *ce* で受けて, それについて新情報を伝達する CQ は自然である.

また, I では, *Qu'est-ce qui s'est passé?* という質問自体は, 意味論上何らかの事柄について尋ねているのではないが, 語用論的には, 今聞こえた音や, 絨毯の上の水といった, 具体的状況について説明を求めている. そこで, その具体的状況を *ce* で受けて, それについて新しい情報を伝える CQ は自然になる.

他方, II では, 何らかの事柄について別の事柄を述べているのではなく, 全体として新しい情報を伝えている. よって, *ce* が受けるべき文脈・状況が存在していると考え難いので, CQ は不自然となる.

更に, III では, 質問は I や IV と同じ意味で何らかの具体的事柄について尋ねているのではないので, *ce* が受けるべき文脈・状況が存在していない. よって, CQ は不自然である.

幾つかの点に関して補足する. I では, 同じ情報を伝えるのに, 無題文も有題文

も用いることが出来る。機能の異なる構文が同一の環境に生起し得るのは一見奇妙に見えるが、以下のように考えれば問題は生じない。「Qu'est-ce qui s'est passé?」という質問は、語用論的には、ある事柄について尋ねているのだが、それを非言語的の主題と称することにすると、この非言語的の主題に対するそれぞれの構文の関連性(ここでは、因果関係とでもいうべき関連性)が、どのように保証されているかが問題になる。有題文の場合は、非言語的の主題を指示代名詞 *ce* で受けることによって、これを果たしている。無題文の場合は、これと異なり、関連性の公理による会話の含意によって、非言語的の主題に対する関連性を保証していると考えられる。即ち、同じ仕事を別の部門が担っていたのである⁹⁾。

IV では、質問は明示的に、返答に対して *ce N* という主題を要求している。有題文はこれを *ce* で受けて、それについて新情報を述べている。無題文は新情報だけを提示して、*ce N* との関連性の形式的表示を忘れている。しかし、この不履行は関連性の公理による会話の含意によって幾分補償されるので、それ程不自然にならない。II や III のように、具体的な文脈・状況が欠如しているにも拘らず、*ce* を主題に立てて談話の連続性を危うくすることに比べれば、この程度の不履行は円滑性を僅かに損なうだけで、それ程大きな障害とはならない。

第一節の(1)~(4)における CQ も、文脈・状況を受けた *ce* を主題とする有題文である。*ce* が受けるような文脈・状況があれば、CQ はかなり多様な環境に生起する。例えば、(1) では、話者が元気が無さそうにしていることを *ce* で受けて、それについて説明していると考えられる。よって、(16) のように、話者が元気が無さそうにしていると聴者が考えていると、話者に想定し得ない場合には、CQ は不自然になる。

(16) *Ça va?*

- a. — *Ma mère est morte hier soir. Comment veux-tu que ça aille!*
 (—) (—)e (0) (+)a (++)bcd
- b. — *Il y a ma mère qui est morte hier soir. Comment veux-tu que ça aille!*
 (—) (—) (0)de (+)ab (++)c
- c. — *C'est ma mère qui est morte hier soir. Comment veux-tu que ça aille!*
 (—)bcde (—)a (0) (+) (++)

3.3. 傍証

(15) に対する傍証を幾つか挙げる。

CQ は文頭に遊離された要素(以下、遊離要素)を採ることができる。

- (17) a. **Ce bruit, François / quelqu'un est tombé dans l'escalier.*
 b. **Ce bruit, il y a François / quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.*

c. Ce bruit, c'est François / quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.
 遊離要素は、普通、文中の何らかの要素でもって受け直さなければならない。すると、(c)では、(a)、(b)と異なり、遊離要素を受けるものが存在しているということになる。それは指示代名詞 *ce* 以外にはあり得ない。NP, cl-V(X) 型の構文において、cl が、NP によって聴者の意識に活性化されたと言者が判断する事柄を受けて、cl-V(X) の中で主題として機能すると解釈するならば、(17) は、CQ では *ce* が主題であることを物語っている。

IQ では、実主語が人称代名詞たり得ないことが知られている⁴⁾。しかし、CQ では、このような制限は掛からない。

(18) Qu'est-ce que c'est que ce bruit?

a. — C'est moi (lui) qui ai (a) fait tomber une assiette.

b. *— Il y a moi (lui) qui ai (a) fait tomber une assiette.

このような両構文の相違は、CQ の *ce* が主題であるとするれば、次のように解釈できる。人称代名詞は、一般的に活性度の高い要素なので、文の残りの部分の活性度が低いと主題にならざるを得ない。これは IQ の機能と矛盾を来す。ところが、CQ では、極めて活性度が高い *ce* が主題となっていて、人称代名詞でも、関係節と一緒に説述となり得るので、機能的に安定する。

(19) の作例を見られたい。何らかの事柄について説明する場合、説明の核心となる部分を導入するための背景となる情報をひとまず提示するのに、SV や IQ は自然だが、CQ は不自然である。

(19) Vous venez avec nous au cinéma ce soir?

a. ○ — Non, mon père est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

b. ○ — Non, il y a mon père qui est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

c. × — Non, c'est mon père qui est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

無題文が何かについての説明たり得たのは、会話の含意によるのであって、その本来の機能は単に全体として新しい情報を提示することにあるのだから、場合によってこのような機能を果たすのも至極当然である。それに対して、CQ は、文脈・状況を受けた *ce* を主題とする以上、それ自体である程度完結した説明になっていなければならない。

4. CQ の意味

4.1. 擬似関係節

関係節には、制限的關係節と同格的關係節の他に、擬似關係節と称されるものが

ある。制限的關係節は、先行詞名詞句の指示対象の同定のための情報を聴者に提供するという同定機能を基本的機能とし、同格的關係節は、先行詞名詞句の指示対象の同定には関与せず、既に同定済みの指示対象について述べるという記述機能をその基本的機能とする關係節である(古川, 1983)。これに対して、擬似關係節とは(20)に見られるように、先行詞名詞句と一緒にあって、統語的には名詞句でありながら、意味的には文的内容を表すものとされる(古川, 1984)。

(20) a. J'ai vu Paul qui fumait.

b. Son pantalon blanc qu'il a remonté laisse admirer qu'il a des bottes. (SANDFELD, Kr. (1977): *Syntaxe du français contemporain, les propositions subordonnées*, Droz, Genève)

c. Avec mon livre qui ne se vend pas, je n'arriverai pas à payer mes impôts. (RUWET, N. (1978): «Une construction absolue en français», *Linguisticae Investigationes* 2)

古川(1984)は、(il y a / voilà) NP qui VP と同様に、本稿で扱っている *c'est* NP qui VP の關係節も擬似關係節と見做している。確かに、CQ では、実主語として、固有名詞や人称代名詞を採れることから、關係節は先行詞の指示対象の同定に関与していない、即ち、制限的關係節ではないと言える。

ところが、CQ の *ce* が文脈・状況を受けているとすると、(il y a) NP qui VP の場合と同様に、NP qui VP が文的内容を表しているという理由でもって、*qui* VP は擬似關係節であると、即断できなくなってくる。先に述べたように、LERCH (1934) は、例えば(3)について、「僕を泣かしたのはお父さんだ」と言っ、その「お父さん」に、「僕を打った」という情報を添加していると考えている。即ち、CQ を、先ず *c'est* NP で思考内容全体を表現しようとして、その後、關係節でもって補足したものと見做しているのである((4)も同様)。もしそうだとすると、問題の關係節は、擬似關係節ではなく、むしろ同格的關係節だということになる。

しかしながら、本稿では、問題の關係節は、やはり擬似關係節であると主張したい。第三節で見たように、CQ は、*Qu'est-ce qui s'est passé?* への返答に用いられる。この質問に対しては、*qui* VP の内容も含めて、完結した返答になる。このような重要な情報を、同格的關係節のような、一般に付加的な情報を表す手段で伝達すると考えるのは不自然である。また、(21)のように名詞句が不定代名詞の場合、*C'est quelqu'un* だけでは、*qui* VP に比べてほとんど情報が無い。ここでは、先行詞名詞句と關係節を併せて、まとまった情報を成しているのである⁹⁾。

(21) Un coup de sonnette. C'est quelqu'un qui entre ou qui sort. Le colonel peut-être? (R. VRIGNY, *Un ange passe*)

即ち、問題の關係節は、擬似關係節であり、先行詞名詞句と一緒にあって文的内容を表して、それ全体が文脈・状況を受けた *ce* に対する説明となっているのであ

る。

4.2. 指示代名詞 *ce*

これまで、CQ の *ce* は、文脈・状況を受けるとしてきたが、本項ではこれをより詳細に考察する。

LERCH (1934) は、(4) において、指示代名詞 *ce* は、*le bruit* を受けるとしている。第三節で扱った、IV の *Qu'est-ce que c'est que ce N?* への返答や、(17) の遊離構文に対する説明でも、便宜上、*ce* は *ce bruit* を受けるとしてきた。しかし、これらの例において、*ce* が名詞句をそのまま受ける、即ち、名詞句と同じ指示対象を指示するという考えには問題がある。

例えば、(17c) の遊離構文に対して、*ce* を遊離要素で置換することは出来ない。

(22) **Ce bruit est François / quelqu'un qui est tombé dans l'escalier.*

これは、CQ の *ce* が *ce bruit* と同一指示でないことを示している。更に、音自体と、人が階段から落ちるといふ出来事は、結果と原因であるが、この両者を繫辞 *être* で結びつけていると考えるのは不自然である。むしろ、「あの音は」といふ遊離要素によって、「あの音の原因」の活性度が高まり、それを *ce* で指示しておいて、それは「人が階段から落ちた」といふ出来事だとしていると考えるべきだろう。ここで、指示代名詞 *ce* は「あの音」から「あの音の原因」へと、指示対象の切り替えを行なっているのである⁹⁾。

ところが、このような *ce* による指示対象の切り替えは、CQ に限られたことではない。以下に、二つの場合を挙げる。

① NP, *c'est NP* の場合：例えば、喫茶店で友人同志がそれぞれに飲み物を注文する場合、「私はコーヒーです」と言うのに (23) のように言うことができる。(朝倉, 1984)

(23) *Moi, c'est un café.*

ここでは、場面と言語外の知識によって、「私は」と来たら「私が注文する飲み物」が問題になり、それを *ce* で指示しておいて、それは「コーヒー」だとしていると解釈できる。即ち、「私」から「私が注文する飲み物」への指示対象の切り替えが起きているのである。

② NP, *c'est AP* の場合：(24a) では、ラシーヌ自身から彼の作品への、(24b) では、単なる交差点という場所から、その状況、より具体的にはそこで起こる事柄への指示対象の切り替えが見られる。

(24) a. *Racine, c'est sublime.* (東郷, 1988)

b. *Ce carrefour, c'est toujours pareil. Tous les jours il y a quelque chose.* (朝倉, 1981)

このように見てくると、指示代名詞 *ce* には、それ自身として、遊離要素から他の事柄へと指示対象の切り替えを行なうという機能が有ると言える。CQ において

も、ce は、この機能を発現して、遊離要素をそのまま受けるのではなく、それによって活性化された別の事柄を指示しているのである。これより、(4) や IV においても、ce は、単純に既出の名詞句をそのまま受けるのではなく、むしろその原因を指示することになる。

更に、I のように、具体的状況下で、*Qu'est-ce qui s'est passé?* と尋ねられた場合でも、ce は「音」や「水」を直接指示するのではなく、その原因を指示していると考えべきだろう。同様に、(1) や (2) でも、ce は、「話者が元気無さそうにしていること」や「話者がブラブラしていること」という具体的状況そのものではなく、その原因を指示している。

CQ の ce は、今までの例からすると、ある事柄の原因を指示しているように見える。しかし、文脈・状況によって活性度が高まった事柄を指示するという風に、広く捉えるべきである。例えば、(25) は何かの原因を述べているのではない。

- (25) *Ce carrefour, c'est toujours pareil. Tous les jours il y a quelque chose. Hier c'est un cycliste qui s'est fait renverser par un camion.*
(朝倉, 1981)

「毎日何かがある」と言った後、「昨日は」と来れば、「昨日あったこと」が問題になってくる。ここで、CQ は、この「昨日あったこと」を ce で指しておいて、それは「自転車に乗っている男がトラックにはねられた」ことだとしているのだろう。

よって、CQ の指示代名詞 ce は、「音」、「水」、あるいは「話者の様子」といった文脈・状況の中の具体的事柄を直接指示するというより、そのような具体的な文脈・状況によって活性度の高まった事柄を指示すると言った方がより正確だと思われる⁷⁾⁸⁾。

5. 結論

本稿の主張をまとめると次のようになる。

- I. CQ は、文脈・状況によって活性度の高まった事柄を指示する指示代名詞 ce を主題とする有題文である。
- II. CQ は、ce の指示対象を NP qui VP (先行詞名詞句+擬似関係節) の表す命題で説明する文である。
- III. よって、CQ が適切であるためには、ce で指示されて、命題で説明され得るような事柄を、聴者の意識に活性化する具体的な文脈・状況の存在が必要である。
(京都大学大学院博士課程)

[注]

* 本研究においては、京都大学のフランス人講師五名の方にインフォーマントになって頂いた。貴重な時間を割いて、快く調査に応じて下さった方々にこの場を借りて感謝したい。

1) 但し、ある種の用法では両者に頻度の差を認めている。詳しくは、WEHR (1984: 79, 93)を参照されたい。

2) 作例の大部分は、五人のインフォーマントに、(++) très naturel, (+) naturel, (0) moyennement naturel, (-) peu naturel, (--) pas naturel du tout の五段階で評価して頂いた。評価の表示は、次のようにした。

○: 最高の評価は(++), 最低の評価は(0)以上。

? : 最高の評価は(++), 最低の評価は(-)ないし(--).

×: (-)ないし(--).

(この方式を用いている限り、この3つ以外のパターンは無かったことを意味する。)

ここで注意しなければならないのは、全てのインフォーマントが、○の付いた文を、?の付いた文より良く評価しているとは限らないことである。特に(16)では、この表示だと全体の傾向が解らないので、データをそのまま提示した。この場合、アルファベットのそれぞれの文字が、インフォーマント1人1人を表している。

なお、?が il y a 固有名詞 ~ や, c'est quelqu'un ~ で見られることは注目に値する。

3) 「関連性の公理」及び「会話の含意」については、GRICE (1975)を参照されたい。

4) LAMBRECHT (1984: 250) 及び同(1988: 154)を参照。このことは、il y a 固有名詞 qui VP の評価に時々大きな分散が見られることに関連していると思われる。なお、関係節が前提されるような文脈では、

il y a moi qui VP は可能であるが、これは、本稿では、IQ とは機能の異なった構文と見做して、問題にしないことにする。

5) なお、CQ が NP として不定代名詞を探れることは、強調構文との相違の一つであることを指摘しておく。

6) 「遊離」という言葉は、一般には、文頭に遊離された要素と同一指示の要素が文中にある場合に用いるようだが、ここでは、より広義に用いることにする。

7) (3) では、ce は「話者が泣いている理由」を指示していると考えられる。Pourquoi ~ ? という疑問文は、その理由を要求しているのであって、その理由自体を指示しているとは言えない。よって、ここでも、ce は、Pourquoi ~ ? という先行文脈をそのまま受ける(先行文脈と同一指示である)という言い方は出来ない。むしろ、理由を要求するという発話行為によって、理由が問題になってきて、それを ce で指示する方の方が良いだろう。

8) 朝倉(1955)は、c'est NP qui VP の用法として、「主語の強調」と、「前文の説明」の他に、もうひとつの用法を挙げている。

(a) C'est votre frère qui va être ravi!
弟さんも定めしお喜びのことでしょう。

(b) C'est le grand qui riait!
兄貴の笑ったこと。

これらの用例に対して、「主語も関係節の内容も聴者にとって未知の事実」と、説明した後、それぞれ、「Votre frère va être ravi.」《Le grand riait.》の感情的表現としている。詳述できないが、(a), (b)を引用先の文脈内で考えると、ce で指示されるような事柄は無いように思われる。これをどう解釈すべきかは今のところ明らかではない。

[参考文献]

朝倉季雄(1955): 『フランス文法事典』, 白水社。

——(1981): 『フランス文法ノート: 基本語の用法』, 白水社。

——(1984): 『フランス文法メモ: 基本語の用法』, 白水社。

CHAFE, W. L. (1976): «Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view», in C. LI (ed.) *Subject and topic*, Academic Press, New

- York.
- (1987): «Cognitive constraints on information flow», in R. S. TOMLIN (ed.) *Coherence and grounding in discourse*, John Benjamins, Amsterdam.
- 古川直世(1983): 「関係節の指示機能と記述機能について」, 『フランス語学研究』第17号.
- (1984): 「フランス語における疑似関係節について」, 『文芸言語研究: 言語篇』第9号.
- GIVÓN, T. ed. (1983): *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*, John Benjamins, Amsterdam.
- GRÉGOIRE, A. (1949): «Un type de phrase méconnu», *Le français moderne* 17.
- GRICE, H. P. (1975): «Logic and conversation», in P. COLE & J. L. MORGAN (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*, Academic Press, New York.
- 川本茂雄(1958-60): 「主題と主語」, 『フランス語研究』第17, 18, 19=20, 24号(同著(1985): 『言語の構造: フランス語そのほか』(白水社)に再録)
- 木下光一(1978): 「フランス語の非人称ヴァリエントと発話の意味構造」, 『フランス語学研究』第12号.
- KURODA, S.-Y. (1972): «The categorial and the thetic judgment», *Foundations of Language* 9. («Le jugement catégorique et le jugement théorique», traduit par M.-L. BEFFA et M. BOREL, *Langages* 30.)
- LAMBRECHT, K. (1984): «A pragmatic constraint on lexical subjects in spoken French», *CLS* 20.
- (1988): «Presentational cleft constructions in spoken French», J. HAIMAN & S. A. THOMPSON (eds.) *Clause combining in grammar and discourse*, John Benjamins, Amsterdam.
- LERCH, E. (1934): *Historische französische Syntax*, 3. Band, Reisland, Leipzig.
- 三上章(1972): 『現代語法序説』, くろしお出版.
- POTTIER, B. (1949): «A propos d'un type de phrase», *Le français moderne* 17.
- SASSE, H.-J. (1987): «The thetic / categorial distinction revisited», *Linguistics* 25.
- 東郷雄二(1988): 「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui: 代名詞 IL と CE の用法について」, 『フランス語フランス文学研究』第53号.
- WARTBURG, W. von et P. ZUMTHOR (1947): *Précis de syntaxe du français contemporain*, Éditions A. Francke S. A., Berne.
- WEHR, B. (1984): *Diskurs-Strategien im Romanischen*, Gunter Narr Verlag, Tübingen.